

「問い」への支援をどのように行うか

— 高校三年生へのレポート課題から —

加 瀬 幸志朗

1. 授業提案の背景 探究の過程を支えるために

本稿は探究学習を行う際に学習者が困難を生じる「問い」創りについての支援をどのように行うか、また、探究学習の過程を支えるためにICTをどのように活用するかを主眼に置いた授業実践である。昨今、学習者が「問う」ことを学習活動の中で展開することの重要性が強調されている。そして、「問う」ことをまた重要視しているのが「探究学習」(探究的な学び)であろう。探究学習を進めるにあたって「問い」の設定は大きな役割を担う。

「探究学習」様々な定義や説明が存在する「包括的用語」(umbrella term)であるが、様々な定義から共通した特色を導いた先行研究から佐藤(二〇二一)は探究学習を「学習者が問いに答える活動を通して、知識創造を行う学習方法」と定義した。本稿でもこの定義に従う。探究学習は、探究の過程として①「課題の

設定」↓②「情報の収集」↓③「整理／分析」↓④「まとめ・表現」と四つの段階に整理されている。この過程を幸田(二〇二〇)はこのように述べる。

とりわけ、課題設定の段階で、探究すべき価値ある「問い」が発見できるかどうかは、その後の学習すべてに影響を与える。だが、そうした「問い」は簡単には見つからない。「情報の収集」から「整理・分析」に進む段階でようやく「問い」が発見できるというようなことも少なくない。²⁾

本稿のようなレポート課題では「問い」を発見・充実させていくことで、書くべき内容が推進する。具体的に学習者はどのように「問い」を発見していくのか。言い換えれば、教員が「問い」の発見までの「足場かけ」(scaffolding)を行うのかという問題で

ある。

また、「問い」の発見をすれば、探究学習はそれで終わりということはない。幸田（二〇二〇）は「留意すべきは、こうした「探究の」学習のプロセスは可逆性を持つ」と注意する。「問い」から「行きつ戻りつ」しながら繰り返す過程をどのように支援していくかも、探究学習に求められる教員の役割である。どのように情報を収集・整理するか、どのようにレポートの形式にするか、文章の書く過程をどのように支援するかなど、一つの実践例を示したい。支援の方法にはICTを用いる。探究の過程とICTの関連については二〇一七・二〇一八年告示の『学習指導要領 総合的な探究の時間編』では「探究の過程においては、コンピュータや情報通信ネットワークなどを適切かつ効果的に活用して、情報を収集・整理・発信するなどの学習活動が行われるように工夫すること」を説明している。ただし、言うまでもなく、ICTをやみくもに使用すればよいということではない。ICTの使用を自己目的化するのではなく、学習者に応じて活用していく必要がある。

2. 授業の展開

2-1 課題設定

本授業の対象は、高校三年生文系二クラス（六五名）である。勤務校はほとんどの学習者が四年制大学への進学を志望しており、また、「総合的な探究の時間」にてレポート提出の経験はあるが、テーマ設定の指導を受けた経験や書いた字数、ICTの活用の有無などは担当者の裁量によって大きく異なる。

また、校内に無線LANが整備されており、Google Classroom（学習管理サービスの一つ）を利用しているものの、「一人一台」のPC・タブレット端末はまだ整備されていない。本実践では学習者の各自のスマートフォン、校内のPC教室を使用した。

教材の多くは単元を終えると、その指導内容や事項について再度触れられることは多くない。課題設定の意図は自分の学びの振り返りも兼ねて、高校三年生までに学習した教材に対し、自らの興味関心に基づいて論じること、大学入学の一步前として経験を積ませたい。さらに白水・小山（二〇二一）は学習者にある程度の基礎知識がないと問いが生まれないことを教育心理学の三つの仮説から紹介した³⁾。学習者がすでに学習した事項を振り返りながら「問い」を創るという活動をねらって、レポート課題は「高校一年生から三年生までに使用した教材から、自分で課題（テーマ）や問いを設定して論証を行いなさい」と設定した。

なお、ここまで特に何の留意もなく、「レポート」という言葉を用いてきたが、成瀬（二〇一六）は学術論文が「学術的なオリジナリティ」とその論証を評価するのに対し、学部レベルのレポート課題では「授業内容を理解している」と「自分の頭を使って書いているか／創意工夫が成されているか」の二点を評価するものではないかと指摘した⁴⁾。高校生の段階においてはなおさら「学術的なオリジナリティ」を求めるよりもここまでの授業内容の理解をどう活かしていくか、学習者の創意工夫を評価したい。そこで、本授業では課題提示とともに、学習者に目指してほしい「課題文の読み取りが適切か」「考察の切り口が適切か」「論証の進め

方は適切か」「(独自の) 結論が導かれているか」「適切な言語技術はできているか」の五項目のルーブリック評価も示した。

2-2. 授業の実際 (二〇二二年一学期 四月～七月実施)

【第0次】「質問づくり」で問いを創り、吟味する

一学期前半 (中間考査前) .. 教科書教材5時間のうち2時間、またミニレクソン形式

まず、具体的に「問い」を発見していくための学習活動は何か。学習者にはまず「問い」を創るための構えが必要となる。本稿では一学期前半を使って実際に問いを創るという「質問づくり (Question Formulation Technique : QFT)」の実践を行い、問いづくりに対しての知見を深めてから一学期後半のレポート課題へと展開していった。「質問づくり」は近年、国語科教育においても実践が積み重ねられてきており、「考えの形成」や学習への動機づけの方略となることが提唱されている (椿山二〇一九・登城二〇一九)。問いを創ることになっていない学習者にとにかく「質問を出す」「質問を言葉にする」ことを主眼に置いた学習活動である「質問づくり」は有効な方略となる。「質問づくり」は、基本的にグループで行う方法であり、その過程は以下の通りである。

- ①「質問の焦点 (学習者たちが質問をつくり出すきっかけとなる文章、写真、図など)」が教員によって示される。
- ②話し合いの四つのルールを知る。(1) できるだけたくさん質問を出す 2 質問について話しあったり、評価したり答えるを言ったりしない。
- 3 質問は発言の通りに書き出す。

4 意見や主張は疑問文に直す。

- ③学習者たちが質問をつくり出す。
- ④質問の種類 (閉じた質問、開いた質問) を分類し、閉じた質問は開いた質問へ、開いた質問は閉じた質問へ変換する。
- ⑤質問に優先順位を付ける (理由づけも行う)。
- ⑥優先順位の高い質問を使って、教師と学習者が次にすること計画する。

⑦質問づくりの振り返りをする。

まず、一学期前半に「問い」を創ることに慣れるということ、自分たちで創った「問い」をもとに学習を進めるという動機づけのために、内田樹「物語」という「欲望」という教科書教材を用いて「質問づくり」を行った。内田樹「物語」という「欲望」は映画を具体例に「物語」とは何かという抽象的なテーマに迫る内容の評論文であり、今回は前半部の「私たちの「解釈したい」という欲望に点火する」という文言を「質問の焦点」にした。

まず、②話し合いの四つのルールについてどれを守るのが難しいかを個人レベルで考えた。1「できるだけたくさん質問をする」のどう「質問」を創っていけばよいのか戸惑っていた学習者が多かった。「質問づくり」の⑥までの活動終了後、アンケートフォームであるGoogle form (以下、「フォーム」と表記) を用いて、優先度が高い質問三つを登録し、一時間目が終了した。

二時間目は前回のフィードバックから開始し、「質問づくり」のルールについて再度クラスで検討した。個人で考えた際は1「できるだけたくさん質問をする」のルールを守るのが難しいよう

に感じていた学習者の多くが活動を通して「人間は普段から言葉のキャッチボールを無意識に行っているため、定められていても反射的に相手の言葉に反応してしまう」ことなどを理由に2「話し合ったり評価したり答えを言ったりはしない」というルールに対する困難さが挙げられた。これは個人で「問い」を創る際の障壁でもあることを指摘し、ここで提出された三つをもとに授業が展開していくことを説明した。

さらに、「問い」を創るための方法を吟味する活動を行った。戸田山（二〇二二）「ピリヤード法」を紹介し、自分たちが創った質問を分析した。「ピリヤード法」とは問いを創る、答えがまだわからない時に「〔設定した〕キーワードに、次々と問い（ピリヤードで言う）手玉」をぶつけることによって、新しい問いを取りだすための有効な方略である。戸田山（二〇二二）は漠然とした問題や大きな問いに対し、いわゆる5W1Hの「問い」や「他ではどうか？／これについては？／これだけか？／すべてそうなのか？」などの「問い」を、ぶつけることでより小さく具体的な「問い」が生まれるという方法を提唱した。自分たちが創った「問い」が何に分類されるかを分析した。二時間目の最後にレポート課題とルーブリック評価を提示し、レポート作成を中間審査以降に行うことをアナウンスした。三時間目以降は選ばれた「質問」をもとに授業を展開した。

また、勤務校では教科書教材と同時並行で共通テスト対策の演習も行っている。その際に、ミニレクソン形式で数回、①論文（レポート）とは何か②探究学習の一般的なステップ③よい論題とは

何か、④書館やネットでの情報収集の仕方（図書館の使い方論文の探し方）、⑤「問い」にならないものについて説明した。

⑤について、学習者の多くが陥りやすいのが「大きな問い」をレポートのテーマとして、着眼点や着地点がわからないまま文章を書くことである。良質でない「問い」の例を示すことで、学習者の気づきを促した。具体的には宅間（二〇〇八）の「問い」であっても論題にならないもの^⑥の次の六点を示した。

- ①すでに解明されていること
- ②大きすぎるテーマ
- ③予想・予言の類
- ④「いいことずくめ」を並べたてる「how to」もの
- ⑤問いの中にすでに論者の強い主張が含まれているもの
- ⑥高度に専門的な知識や技能を必要とするもの^⑥

このように、「問い」に「慣れていくこと」と、「良質でない問い」を示し、「問い」を創ることへの抵抗感を軽減していった。

【第1次】テーマを決め、「問い」を創る

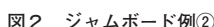
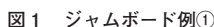
一学期後半（中間審査後）…2時間（図書館を利用）

問いの発見をすれば、探究学習はそれで終わりということはない。問いを創ることで、情報を集める必要が生じたり、情報を集め整理する中で問いにまた立ち返ったり、探究の過程は螺旋状に進んでいく。ICTを活用し、探究の各過程の支援を行った。

中間審査後、まずは一時間図書館を用いて、前次に説明したよい論題について再度触れ、教科書教材の振り返りを個人で行った。暫定的な問いもしくは漠然としたテーマ設定でもまずはよいこと、第1次で決めた「問い」で確定ではなく、「問い」は変わる可能性があることを伝え、「問い」やテーマが決まった学習者から予備調

「問い」を創る経験が多くない学習者には「まず創ってみる」という経験が必要でないかと強く考える。「大きすぎない」「専門的すぎない」ことが「問い」には求められるが、漠然としたテーマや創った「問い」をもとに学習者は情報を集めていく中で「問い」が変容する可能性も十分あり、探究学習の始まりであるので、「問い」に対する抵抗感を減らすことを第一とした。「問い」を創るのに難航する学習者も、他の学習者たちが作成した「問い」や設定したテーマを見て、自らの「問い」を創ろうとしていった。

第2次では自身が作成した「問い」をもとに情報収集、整理を行っていった。その際に使用を勧めたのがGoogle Jamboard（以下「ジャムボード」と表記）である。ジャムボードはGoogle社が提供するオンラインホワイトボードである。ジャムボードでは①ペンで書く、②付箋を貼る、③画像を貼る、④共有して協働で作業する⑤pdf・png画像にエキスポートするといったことができる。特に



— 23 —

やこれから調査していく必要があることを見極め、情報整理に役立たせることができた。このように情報を収集し、整理すること
で、「何を書くか」という書く内容の発見・充実を行っていった。
ただし、ジャムボードの使用は強制ではなく、あくまで紹介に留
め、各学習者のやりやすい方法で良いと伝えた。

ジャムボード以外にも図書館を活用した。図書館においては学
習者が個別の問題について情報を収集したり、レポートの構成に
ついて考えたり、立ち止まっている学習者は教員の支援を受けた
りした。ここで情報収集や、第0次で示したような「問い」で
あっても論題にならないもの」の振り返りにより、前次で作成し
た「問い」を精錬させていった。

【第3次】ワークシートなどをもとに文章を作成する

一学期後半（中間審査後）・・・4時間（PC教室）

今回のレポート課題であるが、文章作成はGoogle document（以
下、「ドキュメント」と表記）を使用した。ドキュメントはクラウ
ドで管理できる文章作成ツールである。文章の作成、編集、共有
印刷ができる。PC教室を四時間使用して、文章作成を行った。
学習者は文章を書き始める前に、前次で作成し始めたジャムボ
ードや自分の持っている文献などから、プリントを用いてレポート
の構造図を創った。構造図は序論・本論・結論型の構成となつて
おり、学習者の考えた内容を反映できるように考慮した。また、
引用の仕方についてのプリントも配布し、引用への指導を行った。
そして、実際に文章を書き始めた学習者に対し、授業内外でオン
ライン上での文章作成支援をした。興味深いのはスマートフォン

でジャムボードやレポートの文章作成を行っている学習者が散見
されたことである。タイピングよりもスマートフォンのほうが文
字を打ちやすく、後で大きい画面で推敲を行うということである。

一時間の授業で教員は適宜机間巡視や、授業中や後にドキュメ
ント上での文章作成支援を行っていた。学習者の文章作成を支援
していった。作品が完成した学習者から推敲のプリントを用いて、
文章の推敲を行った。また、レポートが完成した学習者には自分
のレポートに対して、教員が用意した質問に沿って自身の経験を
振り返らせ、その内容をフォームに登録し活動が終了した。

3. 成果と課題

まず、本稿の目的でもあった「問い」の創出について、支援の
結果どのようになったか、レポートと振り返りフォームからその
変容を見ていく。図3は【第一次】予備調査と【レポート提出時】
の振り返りフォームに登録した学習者のコメントである。

予備調査段階において漠然と考えられていたテーマや問いがレ
ポート提出の際には詳細化していった。ここで学習者Aに注目し
たい。Aは「夢十夜」について一二〇〇字弱のレポートを作成
した。最初の問いはギリシャ神話や夢との関係という漠然とした
ものであったのが、情報を整理していく中でギリシャ神話の「ナ
ルキッソス」に注目して問いを変容していった。図4はAのジャ
ムボードの一枚目である。「夢十夜とギリシア神話」という大きな
テーマから「夢十夜（第一夜）の瞳に移る演出は何の意図があ
る？」と小さな問いを立てることで、内容の拡充を行っていた

予備調査	①選択する教材を教えてください	③今現在どのようなテーマ・問いを考えているか、漠然とでもいいので教えてください。	レポート提出後	②どのような問い・テーマを立てましたか？	④レポート課題の成果として何が完成しましたか？具体的に教えてください。
学習者A	⑤夏目漱石「夢十夜」	「夢」とギリシア神話、及び古代ギリシアでの夢の捉え方を結びつけ、そこに共通するものを見つかる。		夢十夜の第一夜とギリシア神話のナルキッソスの物語との関係性にはどのようなものがあるのか	鏡や白百合の演出、性質に注目して、それらにまつわる伝承や物語内での役割を考察することで理解した。夢十夜の第一夜とナルキッソスの物語の関係性を記したものととなった。
学習者B	⑥葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」⑦梶井基次郎「檸檬」	檸檬とセメント樽の中の手紙がそれぞれ執筆された1920年代の社会と二作の関係		葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」における「女工の手紙」と、主人公である松戸与三の感情の関係は何か。	葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」のラストシーンで見られる、主人公与三の行動の理由と心理状態についての考察
学習者C	⑧平川克美「グローバル化とグローバリズム」	サッカーに関することを書きたい		マンチェスターシティの海外戦略から見る「グローバル化」と「グローバリズム」の対立関係	マンチェスターシティの海外戦略を元に、『グローバル化とグローバリズム』で述べられている対立関係を批判的に検証したレポートが完成した
学習者D	⑨平川克美「グローバル化とグローバリズム」	グローバル化と文化について	➡	日本食を例にとり、グローバリズムとグローバリズムの関係について、文化的な側面、そして現代資本主義、グローバル資本主義の観点から比較する	グローバル化とグローバリズムの関係についての筆者の主張と自分の意見を明確に述べる事ができたと思います。
学習者E	⑤夏目漱石「夢十夜」	夢に関することを書きたい。		「現代日本の開化」は「夢十夜」「第七夜」「第八夜」についてどのように反映されているか。	夢十夜を通して夏目漱石の思想を理解する
学習者F	⑩四方田犬彦「かわいい現象」、⑪池内了「思考バイアス」	「かわいい」要素の個人差思考のバイアスと言語依存の関係性		どのような要素をもって「かわいい」が形成されているのかを日本語と中国語の二つの面から考える。	日本語の「かわいい」は身体的特徴をもって区別することが可能であると分かった。中国語においては日本語の影響を受けているため、そこから言語の接触がみられることがわかった。
学習者G	⑫中村桂子「わかる」と「わかる」こと（科学と人）	「わかる」ためにはどうしたらよいのか。		英語学習における難点。特に大学受験合格を目標として設定し、何が受験生を困らせているのか	今井つむぎ『英語学習法』から英語学習においてこれまでに役立つような学習の方法
学習者H	⑬内田樹「意味と身体」	幼児が言語を獲得するプロセスについて		乳幼児が言葉を獲得する過程とそれに求められることは何か	幼児とのコミュニケーションが大事だということがわかった。

図3 学習者の問いの変容

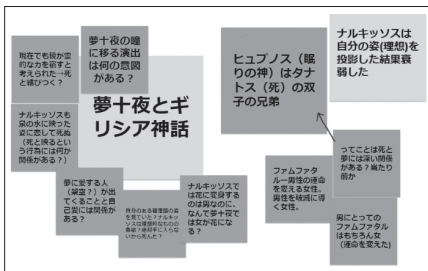


図4 Aのジャムボード

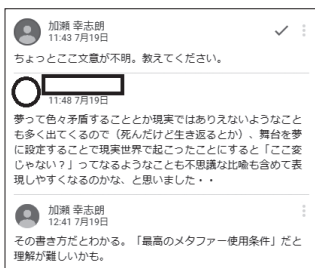


図5 ドキュメントへのコメント

様子がわかる。また、別ページには「第一夜はハッピーエンドか?」「百合の花について」「日本文学における愛と死の描写」といった項目があり、それぞれをレポートでは章ごとにして、まとめていった。Aに個別にジャムボードについての話を聞くと「ジャムボードは色を変えたり、配置も換えられたりするので、作りやすい」「自分が調べた・考えたものごとにとまとめて、あとで文章を作った」と話していた。多くの学習者が情報を収集・整理する際にジャムボードを有効活用しており、探求の過程で言う①②③が適切に進むことで質の高いレポートが作成されたと見えよう。

また、時間や空間を越えて相互に情報が送受信できることがI

CTの強みであり、ジャムボードなどへのコメントも教員が行え、進捗の状況を伺うことができた。文章作成の段階でも、添削を柔軟に行うことができた。図5はAのドキュメントへのコメントであるが、リアルタイムで送受信することで困難を感じる学習者への支援を行うことができる。

また、ジャムボード以外にも振り返りのフォーム「良いレポートを作成するためのポイント」を三つにまとめるなどのようなものがありますか」には、複数の学習者が「明確な問いを立て、伝えたいことをはっきりさせる」「自分で立てた問いから脱線しない」「文章に対して問いが立てられてる」「問いに対する回答適切であること」「一貫性があること」「問いや資料を深く考察できていること」「問いに対する答えがまとめられてる」ということを挙げており、問いへの視点も深めることができた。

一方、学習者のレポートへの振り返りは次のようなものである。

・レポートの主となる論題の決定とジャムボード作成に時間が多くかかってしまい、レポートを授業内で少しも書くことができなかった効率的の悪さが改善すべきだと感じた。

勤務校の実態については先に触れたが、高校三年生での受験ということを学習者は強く意識をしている。右の授業展開で時間を取ったが、授業時間内にレポートを仕上げ、早期提出できたもの一〇名程度であった。では、「書けなかった」学習者は何につきまっていたのか。未提出の学習者九名に対し個別にアンケート調査を行い、書けなかった理由は何か（過程のどこに困難を感じたか）という質問を設けた。半数以上が構想をある程度練った後の「文章

を書く」過程に困難を感じ、このような記述が複数見られた。

・問いをつくるのも難しかったんですが、プロットを練った文章にしていくうちに着地点がわからなくなっていました。

・何を書いているのかわからなくなったからです。

高校三年生という中等教育段階の最後における学習の振り返りとして、カリキュラムデザインを含め、支援の方法を引き続き検討していく必要がある。「問い」と同様、学習者は文章を書く過程にも不慣れで抵抗を強く感じる。国語科のカリキュラムの中に探究的な学びをどのように位置づけるかは今後の課題である。

注

- (1) 佐藤浩章 (二〇二二) 『高校教員のための探究学習入門 問いから始める7つのステップ』ナカニシヤ出版
- (2) 幸田国広 (二〇二〇) 「総論 探究学習とは何か」浜本純「監修・幸田国広編」ことばの授業づくりハンドブック 探究学習——授業実践史を踏まえて—— 溪水社
- (3) 白水始・小山義徳 (二〇二二) 「第1章 質問研究の意義」小山義徳・道田泰司編『問う力』を育てる理論と実践 ひとつし書房
- (4) 成瀬尚志 (二〇一六) 「第1章 なぜレポート課題について考えるのか」成瀬尚志編著『学生を思考にいざなうレポート課題』ひとつし書房
- (5) 戸田山和久 (二〇二二) 『最新版 論文の教室 レポートから卒論まで』NHK出版
- (6) 宅間絃一 (二〇〇八) 「三訂版 はじめての論文作成術——問うことは生きること」日中出版

参考文献

- 椿山美紀（二〇一九）「質問づくり（QTF）」を活用して考えの形成・深化を図った「書くこと」の指導』『月刊国語教育研究』日本国語教育学会編
- 登城千加（二〇一九）「高等学校における読解方略の自発的な活用を促す授業実践の検討——質問づくりによる動機づけに着目して——」『学校教育実践研究』島根大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻

（東邦大学付属東邦中学校・高等学校）